

トルコ小旅行

2013.7.1

2013/5/25 から避暑のため約 3 ヶ月間ラナウに滞在し、その間、17 日、家内とトルコを旅することになりました。初めて訪れる国なので、国境問題が取りざたされている東部を避け、比較的安全と思われる西部と中部を周遊するよう立案しました。辿ったルートは下図の通りです。旅程表を参考 1、宿泊したホテル一覧表を参考 2、旅行費用内訳を参考 3 として添付しました。旅程を定めるために「地球の歩き方」と旅行代理店 (AGODA, HIS) や航空会社 (マレーシア航空, トルコ航空, ペガサス航空) の Web サイトを大いに参考にしました。



6 月 4 日 (火) 晴 トルコへ出発

スラゴンホームステイの実に頼りになるスタッフ HARIS に、彼のいとこで TAXI ドライバーである HASLIN を紹介してもらった。9:00am スラゴンを出発。HASLIN は物静かな好青年であり、運転は慎重である。11:38am コタキナバル国際空港のターミナル 1 に到着。料金 120 リンギを支払う。

18:45 クアラルンプール行き便にチェックインし、スーツケースをマレーシア航空に預ける。預託物はイスタンブールまで引き継がれる。手荷物を出発ホール入口の正面にある冷凍魚販売店の隣にある一時預かり所 (代金は荷物 1 個あたり 6 時間で 8 リンギ) に預け、身軽になって久しぶりにコタキナバルの町を散策。空港に戻り、搭乗し、クアラルンプールで国際線に乗り換え、イスタンブールまで 11 時間の長旅。

6 月 5 日 (水) 晴 トプカプ宮殿見学

現地時間 6:10am イスタンブール到着。サマータイムを実施中ゆえマレーシアとの時差は -5 時間 (因みに日本とは -6 時間)。入国審査、税関検査は簡単である。ATM から現地通貨トルコリラ (TL) を引き出す。イスタンブール市内の殆どの公共交通機関で使用可能なプリペイドカードであるイスタンブールカードを購入。電車の乗降の仕方、乗降場所など地図を片手に尋ねながら空港から地下鉄と路面電車を乗り継ぎ、ホテルの最寄り駅「ギョルハーネ」までどうにかたどり着く。

ホテルに荷物を預けて、スルタンアフメット地区の歴史的建造物や遺物の見学に出掛ける。最初に国立考古学博物館を訪れ、アッシリアやメソポタミアなどの発掘物、遠征途中で死亡したとされる

アレキサンダー大王の石棺, シュリーマンによるトロイの遺跡からの出土品などを見学した。

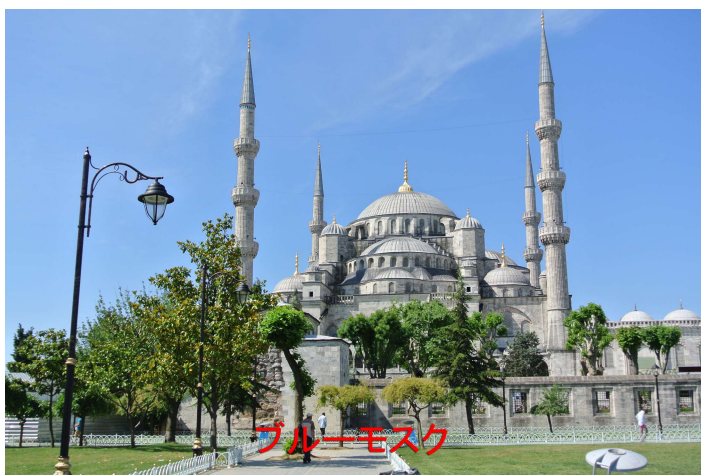
小休止をしてトプカプ宮殿を見学。オスマン朝の支配者の居住地であっただけに大きいだけでなく建物の随所に美しいイズニックタイルやステンドグラスがはめ込まれていて往時の絢爛さが偲ばれる。トプカプの秘宝が納められた宝物殿も圧巻である。

6月6日(木) 晴 アヤソフィア, ブルーモスク見学, ボスポラス海峡クルージング

アヤソフィアは、AC325年にコンスタンチヌス帝により建築が始められ、360年に完成したビザンツ建設の最高傑作である。1453年コンスタンチノールが陥落したときに聖堂はジャーミー(モスク)に変えられ、壁に描かれたフレスコ画は漆喰で塗りつぶされたが、20世紀に一部が再現されたそうである。聖堂の上層階に登って下を見下ろすと壮観であり、所々壁に残るイエスやマリアのフレスコ画がどこか悲しげに見えた。



アヤソフィア博物館のモザイク画



ブルーモスク

広場に出ると6本のミナーレ(尖塔)を備えたブルーモスクの愛称を持つスルタンアフメット・ジャーミーの美しい姿が目飛び込んでくる。イスタンブールを象徴するジャーミーと言われるだけあって壮大な景観を呈す。家内はスカーフを着用して中を見学させてもらう。外見同様内部も壮観であり美しいモザイク模様に見蕩れる。

次に、広大なグランドバザールに足を踏み入れる。ブロック別に分けてありとあらゆる物が販売されているが、日本語で話しかけてくる客引きがうるさくて早々に退散することにした。規模の小さなエジプシャンバザールも覗いてみた。色とりどりの香辛料を売っている店が多かった。近くでピデ(パン生地を薄く延ばして焼いたものにチキンのドネルケバブを巻いたもの)とオレンジジュースを昼食として摂る。量が多く家内と二人でひとつで十分である。少し分かり難かったけどイズニックタイルをふんだんに使用したリュステム・バシヤ・ジャーミーを訪れた。

旧市街地と新市街地を結ぶガラタ橋付近からボスポラス海峡をクルージングする船が出ている。15:00 出航の船に乗ることにした。イスタンブールはヨーロッパ側とアジア側にボスポラス海峡を挟

んで分かれており、このクルージングは黒海を目指して同海峡を遡っていき、途中から戻ってくる。1時間30分のツアーで12TL。下船した近くに名物のサバサンド(7TL)を売っている店があったのでひとつを二人で分けて食べる。サバの塩焼きを挟んだホットドックである。レモン汁をかけて食べると意外に美味しい。

6月7日(金) 晴 イスタンブールのいろいろな公共交通機関に乗る

国鉄スイルケジ駅を見学。ここは、オリエント急行の発着駅である。アガサクリスティの本を読んでいたのが親しみを感じた。路面電車T1に乗り、トプカピ駅でT4に乗り換え、エデルネカブ駅で降りる。ミフリマー・スルタン・ジャーミーを経由して20分くらい歩いてカーリエ博物館へ向かう。ここは5世紀に修道院として建てられたが、オスマン朝の時代にモスクに改修され、20世紀に修復されて漆喰の下から見事な聖母マリアやキリストのモザイク画が現れたという。外見も円天井のドームが緑と薔薇に囲まれて美しい。車がないと少しアクセスし難いところにあるが訪れる価値がある。

名前が同じであるが、Mbのエデルネカブ駅まで20分くらい歩く。Mbとは、メトロバス路線を言い、レールこそないが電車のように専用の道路の上を走り、電車同様の停留所がある。他の車は専用道路に入れないので渋滞することがなく高速で飛ばす。バスはボスポラス大橋を渡り、アジア側に入る。Mbの終点「ソユトリュチェシメ」で降り、昼食を摂った。トルコ人にならって紅茶(チャイ)を頼む。専用の小さな器があり一杯1.5TL。彼らはチャイを頻繁に飲む。男たちが軒先に屯してチャイを飲んでいる光景を何回も目にした。チャイの出前もある。



ヨーロッパ側の「メジディエキョイ」まで戻り

路線M2, F1, T1を乗り継ぎホテルに戻る。乗換えのつど駅員や乗客に乗るべき電車の方向や場所を確認したにもかかわらず失敗もした。公共の移動手段を利用してすぐに気付いたことだが、トルコの若者のマナーは素晴らしい。年長者に必ず席を譲るし、乗降の際など手荷物の運搬を手伝う。翌朝早く出発しなければならないので5:15amの空港シャトルバスを予約しパッキングを済ませる。シャトル代金はひとり14TL。

夕食は、ホテル近くのロカンタで済ませる。ロカンタとは、大衆食堂のことで安くて旨い。スープ各1、サラダ1、なすとひき肉の詰め物1、チャイ各1をオーダーして32TL。トルコのレストランでは何か料理を頼むと必ず山盛りのパンが付いてくる。そしてそのパンが美味しい。

6月8日(土) 晴 カップドキアへ

4:30am起床。10分遅れて来たシャトルバスに乗車し、ヨーロッパ側のアタチュルク空港へ向かう。イスタンブールにはアジア側とヨーロッパ側に空港がある。6:00am空港到着。シャトルバスを国際線側で降ろされたので、大急ぎで国内線へ移動。3日前イスタンブールに到着したときに国際線から国内線への移動通路を調べておいたことが幸いした。チェックインカウンターで搭乗手続をし



たときは出発時刻(7:05am)に対し1時間を切っていたが、受け付けてくれた。ネブシェヒル空港に定刻8:20amに到着。前日電話で依頼していたのでシャトルバスの運転士が我々の名前を掲げて到着ゲートで迎えてくれた。ギョレメのホテルまでのバス代金はひとり20TL。我々のホテルは高台にある洞窟ホテルであり、小さな山が連なったような不思議な形をした岩をくり抜いていく

つかの部屋が作られている。ホテルからカッパドキア特有の奇石・奇岩群がよく見えた。

6月9日(日) 晴, 一時雨 グリーンツアーに参加

前日現地ツアーに申し込んだので9:30am 迎いの車がホテルまで来る。オランダ人男性, 台湾人男女, 中国系アメリカ人女性たち, スペインに隣接した小国から来た女性たち, 家内と私の総勢14人からなる。1日行動を共にするので全員自己紹介を求められた。

最初に岩が林立し果てしなく広がる一大奇観ギョレメパノラマを訪れた。次にウフララ溪谷の中を3kmくらい散策。巨大な岩石の壁に挟まれているにもかかわらず溪谷を下りていくとポプラ, 杏, オリーブなどの緑とポピーや薊のような色とりどりの花が咲き乱れており快適なトレッキングであった。川の流れて沿ってコテージが並んでいるところがあり, そこで昼食。次に



岩窟の中に作られた修道院を訪れる。修行のためかもしれないが、なぜこのような厳しい自然環境の中に岩窟教会を作ったのだろうか?この溪谷は真冬に零下20度になるという。次に訪れた地下都市も驚きの連続であった。地下に縦横に蟻の巣の如く通路が設けられており, 礼拝堂, 教室, 寝室, 格納庫などがある。通路は, 所々しゃがんでやっと通過できるような場所があり, そこを通過するとまた広くなる。敵からの攻撃を防止するための工夫ではないかと推察する。往時には4万人が住んでいたという。光の全く届かないこの地下に!!

ツアー終了後, スーパーマーケットに行って, Kahvaltılık Sos を購入。ホテルの朝食時にトマトペーストのようなものが出され, パンや生野菜につけて食べると美味しいので, 何処で入手できるのか尋ねた。「朝食のソース」という意味であり, 昔は自製し, 家庭ごとの味があったそう。日本の味噌のようなものだろう。みやげ物屋で乾燥無花果などを購入し, 明日のカイセリ行きのバスの時間

を確認し、ギョレメの街を散策。ツアーのガイドに再会し、彼のオフィスでお茶をご馳走になる。レストランを紹介してもらい夕食を摂っていると、ツアーで一緒だったオランダ人男性も同じレストランにやって来て談笑しながらの夕食になった。

6月10日(月) 晴 カイセリ

9:00am のオトビュスでカイセリに向かう。トルコ国内の移動はバスが基本である。都市の郊外



に長距離バスの発着所であるオトガルがある。オトビュスとは長距離バスのことであり、オトガルを結んで走る。オトガルと街の中心地への移動は、電車、シャトルバス、市内バス、ドルムシュ、タクシーなどに依存する。ドルムシュとは定員にならないと発車しないバスマニのこと。

11:00am 頃、ホテルにチェックインし、地図を片手にカイセリの中心地まで 30 分くらい歩く。地図には道路名が記入されていたけど肝心の道路に道路名の表記がないので通行人に方角を尋ね

る。英語を話す人が少なく意思疎通に苦戦していると人だかりができる。本当に親切な人が多い。カイセリ城、フナトゥ・ハトゥン・キュルリエスイを訪れる。後者は、ジャーミー、廟、神学校が集まった複合建築であり、修復中で休館していたが、日本から来たということで特別に内部を見せてくれた。

今回のトルコの旅で最も東に来たことになる。西洋的な顔つきの人々、中近東的あるいは東洋的な



顔つきの人々など多様である。

6月11日(火) 晴 イズミル

カイセリ空港で日本から来たツアー客に出会い、ラナウのロングステイについて紹介した。8:50am 発のペガサス航空に搭乗し 10:20am イズミル空港着。イズミルはアンカラに次ぐトルコで3番目に大きい都市である。シャトルバスに乗って町の中心部に向かう。代金ひとり 5TL。バスを降り、スーツケースを引っ張りながらホテルを尋ね歩く。ホテルはエーゲ海に面していた。

昼食後、コナック広場にあるイズミルのシンボルである時計塔、アタチュルクの立像を見て考古

学博物館を目指す。ここには、主にエフェス遺跡からの出土品やローマ時代(AC1~2世紀)のものが展示されている。古代の貴婦人が身に付けたと思われる優雅な装身具や写実的な彫像などから高度な文明が偲ばれる。隣接している民俗博物館を見学後、古代アゴラ(市場の跡)に向かう。商店街に沿って歩いて行くと、店の人からよく話しかけられ、ときどき立ち止まる。楽器屋さんでは初めて見る楽器を演奏してもらった。親日的だからなのか人情に厚い国民性だからなのか分からないが皆さん温かい。古代アゴラ(古代ギリシャの都市の広場、政治・経済・文化の中心地)はローマ帝国のアントニヌス帝により再建されたという。コリント様式の支柱がたくさん並んでいた。遺跡の中で結婚式が行われていたので花嫁の写真を撮らせてもらった。イズミルではミロのビーナスを想わせる美人をときどき見かける。



イズミル考古学博物館
— 古代の写実的銅像

バザールを横切ってコナック広場に戻り、インフォメーションを訪れ、翌日の目標であるエフェスへの行き方を教わった。ソーセージサンド、ポテトチップス、コーラを購入し、ホテルの部屋で簡単に夕食を済ませる。

6月12日(水) 晴 エフェス見学

イズミルに「バスマーネ」という国鉄の終着駅がある。ここから発する鉄道はアンカラなどを經由してトルコの東部に及んでいる。セルチェックまで1時間20分電車に乗り車窓からの景色を楽しむ。運賃はシニア割引が適用されて、ひとり4.75TL。



イズミルからセルチェックに向かう電車



エフェス — 大劇場

車内にスイット(胡麻付きドーナツパン)を売りにくる。セルチェックから2.5TL 支払いドルムシュでエフェスへ。大形バスが何台も並んでおり、たくさんの観光客が押し寄せていた。エフェスは古代ギリシャの街全体の遺跡であり、保存状態がよく街に必要ないろいろな機能の跡が残されており、大規模である。この円形大劇場は今でも

コンサートなどの会場に使用されるそうだ。たまたま剣闘士(グラディエーター)のショーが行われる場面に出くわした。玉座に座る皇帝と御後の前で闘うというショーであり、出演者は全員古代の衣装を身に纏っていたので、その一画だけ時代が遡ったようであった。



帰りのドルムシュをしば

らく待ったが来ないのでセルチェックまで 40 分くらい歩くことにした。途中黄桃を売っている屋台があったので一休みしてかじる。セルチェックのオトガルからイズミルのオトガルまでオトバスを利用。ひとり 9TL。イズミルのオトガルから中心地まで市内バスに乗る。乗降にはバスカードが必要であることや降りる停留所名などを運転士や乗客に教えてもらう。

インフォメーションに立ち寄り翌朝のベルガマまでのオトバスを予約。

6月13日(木) 雨のち晴 ベルガマ

イズミルのオトガルまで TAXI で行き、8:30am のベルガマ行きオトバスの切符を購入。ひとり 10TL。1 時間 30 分でベルガマ市内に到着。同乗していた乗客が我々のホテルを知っており雨の中一緒に降りて傘をかざしてくれ TAXI を止め運転士にホテル名を伝えてくれた。

ホテルは高台にあり、小さいけどお洒落なギリシャ風の建物であり、HERA という名である。HERA とは ZEUS の妻の名であり、案内された部屋の名前が POSEIDON (ギリシャ神話の海の神)、オーナーの名前が ALEXANDER である。オーナーがとても親切であり、我々の 1 泊 2 日の行動予定を作ってくれた。ホテルというよりもホームステイという感じである。



オーナーが言った通り午後から晴れたのでアクロポリスを訪ねる。ここは下、中、上のアゴラからなり、上のアゴラへはロープウェイで登っていく。そこには神殿、祭壇、劇場、図書館、武器庫などがある。古代の人はなぜこんな高い丘の上にアゴラを作ったのだろうか？大きなアーチの神殿の前で記念撮影をしている若いグループがいて、"sato,dua,tiga"と掛け

声を掛けていたので、久し振りに聞くマレー語に思わず反応して話しかけたらインドネシアからの観光客であった。

小奇麗なベルガマの商店街を歩いて中心地にある博物館を訪れた。そこここに男たちが屯しチャイしている。博物館にはベルガマの出土品が保管されていたけど、めぼしいものはドイツに持ち去られたということである。小休止の後、明日予定していたアスクレピオンに TAXI で向かった。古代の総合ヘルスセンターだそう。あまり訪れる人のいないひっそりとした広々とした遺跡である。帰りは下り坂ゆえ人家の並ぶ道を歩いた。石畳の細い坂道の両側に石壁が連なり、白を基調としているが薄い黄色やピンクの壁もある。

家々の窓やテラス、玄関前には緑と花が配置されている。ここはトルコの中のギリシャなのかもしれない。

夕食のためオーナーに教えてもらったレストランに行く。高台に位置し街を一望できる場所にある。ラムの BBQ 風のもの、茄子とトマトの炒めもの、ピーマンのライス詰め、Kahvaltılık Sos とワインを注文し、眺望と味覚を楽しみながらこの旅行で最高の贅沢をした。しめてふたりで 113TL。



ベルガマ - 街並を眺めながら夕食

6月14日(金) 晴 チャナツカレ

朝食時に、今日予定していたベルガマ観光を昨日中に終えたので早めにチャナツカレに向かいたいことをオーナーに伝え、14:00 に予約していたオトビュスを 11:30am に変更していただいた。昨晚から宿泊していた若い日本人カップルに出会う。戸塚在住ということゆえ近隣の方にこんなところで出会うとは意外な思いである。地下のワインセラーとバーを見学させてもらう。寒い冬にこの中で飲むそうである。

10:00am にチェックアウトし、オーナーに市内バスの停留所まで送ってもらう。素晴らしいもてなしに感謝しながら、市内バスに乗ってベルガマのオトガルへ向かう。ベルガマとホテル HERA はいつか再訪したい。オトビュスの運賃はチャナツカレまでひとり 35TL。約 2 時間の道程である。昼食時にかかるのでスミットを購入し、乗車した。

15:45 にチャナツカレのオトガルに着いた。丁度いた警官にホテルの名前を告げ、乗車すべき市内バスの路線名と降車停留所を尋ねたら調べてくれて、該当バスの運転士に伝えてくれた。チャナツカレのオトガルは中心地からかなり離れている。ホテルが近づくと運転士が大きな声で教えてくれた。

ホテルにチェックインして夕食に出掛ける。近くの店でツナサラダとチキンのカレー煮、チャイを二つ注文。大きな器にサラダがのっており、それ同じくらいの大きさの皿にチキンがのっていた。皿

の縁の部分が、小さく刻んだ人参、さいころ大に切ったじゃが芋、グリーンピースを使って飾られており、まるで皿の模様のようにであった。例によって山盛りのパンがついてきて、25TL.

トルコのレストランで出てくる食事の量はどこも多い。日本人と比べて大食漢が多いからだろう。100kgを優に越えると思われる男女をよく見かける。縦ではなく横が大きい人がたくさんいる。子供の頃からたくさん食べるからだろう。世界保健機



関(WHO)のデータによると2011年の男女合わせた平均寿命は日本が83歳に対しトルコは76歳である。肥満がこの差の原因の一つになっているものと推察する。しかし、世界三大料理と言われるトルコ料理で食欲を満たす生き方も選択肢として悪くないのかもしれない。

6月15日(土) 晴のち雨 トロイの遺跡見学

ホテルからトロイ遺跡行きバスの発着所まで歩き、バスに30分くらい乗ってトロイの遺跡入口に到着。そこから10分くらい歩くとチケット売り場がある。遺跡の傍に木馬の模型があった。この地はBC3000年頃に集落ができ、その後エーゲ海交易の中心地として栄枯盛衰を繰り返したという。文明が栄えるつど同じ場所に都市を作ったので縦方向に9層の都市の遺跡を見ることができる。なぜ



同じ場所に作ったのか理解に苦しむけど事実である。また、出土品の殆どが紀元前のものであり、他の遺跡で見てきたのと異なり原型の面影すらとどめておらず、素人には石がたくさん散乱しているだけにしか見えない。シュリーマンの「古代への情熱」に魅せられて訪れたけど、十分に下調べをして専門的知識を携えて訪れるべき遺跡のように感じた。

6月16日(日) 曇りのち晴 チャナッカレ散策

旅もいよいよ終盤に入り疲れをとるために近場だけを散策することにした。チメリッキ城砦公園の中にある軍事博物館を現役の兵隊に案内してもらった。ここにはガリボリの戦いに関する資料が展示されている。第一次世界大戦のときにダーダネルス海峡を通過してチャナッカレに侵攻してきた連合軍をオスマン軍が如何にして撤退させたか、ということ誇らしげに説明していた。初代大統領アタチュルクとガリボリの戦いはトルコ人にとって大きな誇りなのだろう。見学に来ていた子供たちから「ジャポン、ジャポン」と囃され取り囲まれてたくさん写真を撮られるなど映画スター並みの扱いを受けた。

昼食を摂り、明日のオトビュスのチケット(イスタンブールまでひとり 50TL)を購入して、ホテルに戻り、移動に備えてパッキングをする。チャナッカレからイスタンブールへは飛行機が飛んでいない。夕食のため外出すると時計塔の傍で座り込みデモをする小規模な集団を見かけた。今デモが各地に飛び火している。自由を求める世俗主義と呼ばれる人々とイスラム教の教えにもっとピュアに従おうとするエルドアン首相の考え方との対立が根底にあるようなので歩み寄りが難しいと思う。民主的に解決されることを望むが当分尾を引くだろう。

6月17日(月) 晴 再びイスタンブールへ

チャナッカレでの我々のホテルはダーダネルス海峡のすぐ傍のアジア側にあった。イスタンブールへ行くオトビュスはチャナッカレのオトガルを出発しフェリでこの海峡を渡ってヨーロッパ側に入る。オトガルまで行く必要がなく埠頭近くで待っていればよい。10:00amにやって来たオトビュスに乗りそのままフェリへ乗船。ヨーロッパ側に渡ったオトビュスはトルコの田園地帯を直走る。道路は空いており、よく整備されている。料金所と思われるようなゲートはない。途中のオトガルや道路脇で乗客が乗降する。大きなサービスエリアで30分くらい休憩し運転士が交代した。昨日買っておいたパンとケーキで昼食を済ませる。お茶、ジュース、冷水などがサービスされる。車窓からマルマラ海が望める。イスタンブールが近づくにつれ高層ビルが増える。15:30 イスタンブールのオトガルに到着。

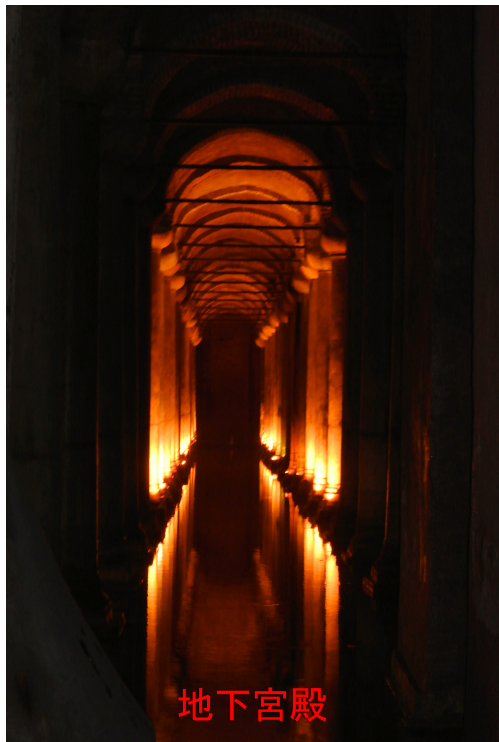
メトロ M1 線と路面電車 T1 を乗り継ぎ旧市街地へ行くことにした。オトガルの規模がやたら大きく M1 の改札口にたどり着くのに一苦労した。それぞれのイスタンブールカードに 10TL チャージし、M1 に乗り、立っていると中年の男性が席を譲ってくれた。途中で T1 に乗り換えスルタンアフメット駅で下車。Google Map でホテルの場所を検索しておいたけど、道路が込み入っており場所が分からない。警官に住所を見せて尋ねたらホテルに電話してくれて行き方を訊いてくれた。その通りに行ったが、まだ分からず、別のホテルで尋ねた。また電話をしてくれて場所を尋ねてくれた。今度はすぐに分かった。旅行の最後を飾るのに相応しい落ち着いたシックなインテリアのホテルである。

「地球の歩き方」の先頭に紹介されているセリム・ウスタというレストランに夕食を摂りに行く。1920年創業ということだが店内は改装され新しい。いつものようにスープ×2、サラダとギョフテ各1をオーダーし 40.5TL。ギョフテとは牛肉やラムのひき肉にスパイスや玉葱を加えて形を整え調理したもので、ラムを注文した。隣に座っていたアフリカのボツワナから来た白人夫婦が話しかけてきた。

数軒先に風格のあるカフェ(1860年創業)があり出窓に色とりどりのお菓子が飾ってある。気になったので中に入ってみると広い空間がいくつかのコーナーに分けられており、それぞれに色鮮やかなお菓子が陳列されていた。あるコーナーに陳列されていたものは「食べると甘すぎて脳みそが壊れてしまう」と娘が言っていた「ロクム」である。砂糖にデンプンとナッツ(クルミ、ピスタチオ、アーモンド、ヘーゼルナッツ、ココナッツなど)を加えて作るお菓子で、「ゆべし」をさらに甘くしたようなものである。いろいろに彩色されているので組み合わせると鮮やかである。明日お土産として購入することにした。

6月18日(火) 晴 イスタンブールを観光バスで周遊

この日は観光の最終日であり、遠出して疲れないう近場を回ることにした。ホテルの近くに地下



宮殿がある。入場料を払って地下にもぐると、そこには照明に照らされたたくさんの列柱が並び神秘的に水に映されている。空気はひんやりとしており、荘厳な雰囲気である。宮殿とは名ばかりで壮大な水がめである。4-6世紀に遠くブルガリア辺りから水を引いて作られたとのこと。今まで見物してきた建造物は「神に捧げたり」「王を称えたり」する目的で作られたのに対し、これは市民の生活のためのインフラである。

スルタンアフメット広場に2階建て観光バスが停車していたので乗車した。2時間でイスタンブールの旧市街地と新市街地を一周し、ひとり20ユーロだそう。途中下車して次に来るバスに乗ることもできる。バスは旧市街地を出発し新市街地に入り旧市街地に戻ってきた。一周して感じたことは、「イスタンブールの観光の中心地は旧市街地であり、その中でもスルタンアフメット地区である」と言

って過言ではなさそうということである。今回、2回とも同地区のホテルに宿泊したことは正解だったようだ。都会をよく知っている私たちは新市街地のように近代的建造物が林立している風景を目にしてもあまり感動しない。新市街地から旧市街地に戻ってきて長い城壁とビルが重なって見える景色に出会うと一段と興味が湧く。

ピデ(ドネルケバブ(回転焼肉)と生野菜をクレープ状のものに包んだ食べ物)を購入しホテルの部屋で昼食。お土産用にロクムも購入した。明日の空港までのシャトルバスについて尋ねるとホテルのシャトルがあるという。料金は一台25ユーロであり、予約した。

休憩後、路面電車にひと駅乗ってトルコ風パスタを食べに行った。スパゲッティ、ピーマンのライス詰め、パプリカのライス詰め、石榴ジュース各1で17TL。900円足らずでふたりとも満腹。オレンジと石榴が山積された店を良く見かけた。何れもジュースの材料であり、とくにオレンジジュースをよく飲むようである。石榴ジュースは美味しかった。

ホテルに戻りトルコの酒“RAKI”を売っている店を訪ねると近くのスーパーマーケットを教えてくれた。葡萄から作る蒸留酒で45%である。店にいた客が、私がRAKIを買うのを見て、必ず水で割って飲むのだとか、水2に1の比率だとか、何か食べなが



ら飲むこととか、飲みすぎると眠ってしまうとか、いろいろと忠告してくれた。大瓶を買おうとしたら中瓶を買うように言われ、従った。

6月19日(水) 晴 20日(木) 晴 ラナウへ

コタキナバル到着時刻に合わせて TAXI を手配してもらうようスラゴンホームステイにメールを送信した。11:00amに出発したシャトルは渋滞もなく空港に30分くらいで到着。荷物のセキュリティチェックを受け、搭乗手続きをしようとしたが早すぎてカウンターが開いていない。しばらく待つて搭乗手続きをすると荷物はコタキナバルまでスルーされるがクアラルンプールでコタキナバルまでの搭乗手続きをする必要があるということだった。さらにマレーシアに入国後日本へ戻る航空券を見せよう求められた。クアラルンプールでマレーシア入国時に提示を求められるのならば納得するが未だ何故だかよく分からない。出国手続きには時間を要した。窓口での処理は簡単だが出国する人の数が多く窓口にたどり着くまで1時間程度要した。簡単な昼食を済ませて TL をユーロに両替。十分余裕を見ていた筈なのに定刻まで1時間程度になっていた。初めての空港の場合、要領が分からないので余裕を見て行動する必要性を再認識した。

クアラルンプールでマレーシアに入国しコタキナバルまでの搭乗手続きを済ませて CIM カードにチャージしスラゴンホームステイに携帯からメールした。すぐ返信があり TAXI は手配済みとのこと。ところがコタキナバルに向かうフライトが予定より約1時間遅れたので待つよう運転士に携帯メール。コタキナバルの到着ゲートで運転士が待っていた。



トルコは、いろいろな文明や文化、価値観が混在した国のようです。昔と今、西洋と東洋、イスラム教とキリスト教、自由と自制、...

どでかい国旗が高々と掲揚されて翻っている様をよく見かけました。国民の国家への忠誠心や愛国心が強いのだろうと推測しています。

トルコの多くの優しい人々に支えられて恙無く旅することができました。上辺だけかもしれませんが、この国を垣間見ることができて喜んでいます。

以上